

連続講演・シンポジウム

大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か

第一回「良い子」の自分くずしと自分づくり ー少年期不在を問う

竹内 常一

(國學院大學教授)

石澤 雅雄

(京都市立祥豊小学校教諭)

池添 素

(らく相談室室長)

春日井 敏之

(立命館大学文学部教授)

春日井敏之： ただいまより、「大人と子どもは出会えるかー良い子とは誰か」をテーマにシンポジウムを始めさせていただきます。初めに、主催者を代表して応用人間科学研究科教授滝野功より一言ご挨拶を申し上げます。

滝野功： 応用人間科学研究科教員として去年、来たばかりです。臨床心理学が専門で、夢とか幻想、カウンセリングかと内に閉じこもってやるという感じがあるのですが、立命館の応用人間科学研究科はもっと外に開かれたものにしようと、さまざまな学問領域の連携と融合がモットーになっている独立大学院です。本当にいろんな領域の人に出会ういいチャンスになるなど、やる気一杯です。

このシンポジウムは、ここに来て最初に企画したのですが、竹内常一先生を、院生とか学生に出会わせたいという願いがありました。竹内先生との出会いを話します。「ひと塾」という名称を聞いた人はどれくらいいますか。もう30年ほど前、遠山啓という数学者が、日本の教育はこのままではだめになるということで、教師と親と子どもと三者が一緒に出会って、考えて、学ぶことで教育を変えていかないといけないという危機感を持って始めたものです。その場として「ひと塾」を各地につくって、夏に数日間全国から集い、合宿して大変面白い話し合い、ワークショップがあったんですね。それに大分前、娘が中学生の時に行きまして感動して帰っ

てきた。日本にもこういうすばらしい先生がいるのかと目の色が変わっていた。僕も翌年から行って、すごい熱気にあふれた合宿でした。そこで竹内先生に会いました。それが一つの出会いです。

遠山啓先生は30年前、日本の教育に危機感を持って語られた。それから30年以上たったわけですが、その後、どうなったか。教育は以前よりはるかに悪化して目もあてられないような状態になっています。最近では長崎の児童誘拐殺人事件とか、佐世保の女子小学生の事件とかが続いて、子育てに自信を持っている親はほとんどいない、現場の教師も疲れ果てている。こういう状態が続いています。

一体どうなってしまったのか考えているわけですが、一つには教育だけの問題ではないと思いますが、「なぜ」という問いを出すことができない。それを知らないというか、そういうことで日本の教育は来てしまっているのではないかと思うんですね。今回のシンポジウムは始めから問いで「大人と子どもは出会えるか」「良い子は誰か」という問いを投げかけるシンポジウムになっています。問いを皆さんに投げかけて、一人ひとりに考えていただいて、現場に帰っていただき、工夫し、そこから発展できるような会であらばいいなと思っています。竹内先生はフロアとシンポジストと話をし、立ち上がってくるものを大切にしたいと思っておられる方なので、ぜひ楽しみにしていただきたいと思います。

春日井： それでは一部で話題提供していただきます國學院大學文学部教授、竹内常一先生をご紹介します。先生は長く、全国生活指導研究協議会の常任委員会代表を務められ、日本教育学会の理事も務めてこられました。現在は日本生活指導学会代表理事を務めておられます。「良い子」の自分くずしと自分づくりー少年期不在を問う、という今回のテーマに象徴されていますが、少年期・思春期の問題を心と身体の視点から論及されています。また、思春期・青年期の課題を「自分くずしと自分づくり」と表現され、自己の解体、再統合の道筋を学校現場の実践とリンクさせながら論及してこられました。それでは竹内先生から話題提供していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

講 演

竹内常一： 今日、これから話をすることは10年近く前、立命館大学の琵琶湖草津キャンパスの自治会に呼ばれて大学祭の前にこの話をしたことがあるんです。今回は二度目で、どれだけ私の方が賢くなっているかという、私は賢くなっていな

いなと思うのです。

(1) 子どもの自分くずし、その後

子どもの自分くずしと自分つくりと言いましたが、子どもはますます自分くずしを続けていって、どこで自分つくりへと転換していくのかという、いや、これは大変だなという思いをしています。だから『子どもの自分くずしと自分つくり』の次の著書は、『子どもの自分くずし、その後』として、『続子どもの自分くずしと自分つくり』という言い方はやめたんですね。

実は最近、珍しく長いタイトルの本を書きました。『大人が子どもと出会うとき、子どもが世界を立ち上げるとき』という本です。自分くずしをする子どもたちの前で、自分が生きてきた世界は、総崩れになっていくわけですよね。

自分くずしは子どもの側からすれば自分が生きてきた世界を崩していく、破壊していくことでもありますが、そのために子どもはまるで秩序のない、アナーキーな中にはめ込まれていく。投げこまれていって振り回されるわけですが、そこから子どもがどのような世界くずしから世界づくりへと行けるか、実はこの本を書いた時から考えていました。だけど自信がなかったのです。今度の本では日本の教師たちが子どもたちとつながりながら、自分の前に自分が生きる世界を立ち上げている子どももいるんだということが、少しわかったので、そういう長いタイトルの本を書いたわけです。

こういう言い方をするのは、佐藤学さんと私だと思います。私は、子どもの自分つくりと世界づくり、その間に子どもたちの関係変革において、子どもの自分つくりと関係変革と世界づくりという筋書きを描いています。簡潔に述べれば、そうなっています。佐藤学さんは自分の学び論を自分くずし、仲間づくり、世界づくりと言っている。期せずしてこういう問題提起を二人がしているのは、今の時代の中で、そういう議論をすることが求められているのではないかと。

子どもたちは小さい時から、ある自分を大人との関係でつくられているのですが、つくられてきた自分というものが、だんだんと生きにくい自分になっていく。それだけではなくて、大人が自分たちに、押しつけたというか、学校が自分たちに与えたというか、押しつけた世界が自分を迎えてくれるのではなく、自分に対して歯を剥いてくるように見える。そのために親や教師、家庭や学校がつくってきた自分、それによってつくられて、今自分が住んでいると思われる世界を壊さないと、ハッピーに生きられないのではないか。そこにいる限りは息が詰まってきて生きにくい。そういう思いの中で、何とか自分と世界を変えるために、それをつくってきた大人

との関係を揺さぶってみる、揺さぶりながら、大人との関係をぶっ壊してみれば、今までの世界と今までの自分も壊れるじゃないか。いや、自分の中に住み込んでしまった支配的な他者も壊すことができるんじゃないか。そして一緒に生きていく、共感的な他者とともに新しく世界を見つけるために旅立っていけないのではないか。こういう物語が、どうもあるのではないかという感じがするんです。

しかしこの物語がなかなかどっこういうまくいかない。たまにうまく行く人もいる。30年くらい、いろんな中学生と高校生と付き合ってきましたが、ものの見事にうまくいった子どももいるんですけど、自分を崩し続けて今なお苦しんでいる人もいるわけで、なかなかこの物語がうまくいかない。物語がうまくいく時は、多分、日本のあり方も変わるだろうと思います。これがまず話したいことの大本です。

(2) 学校・家庭・国家に一適応過剰な子どもたち

その中で、実は、良い子に絞っているところに問題があるんです。学校適応過剰な子ども、学校に過剰に適応している良い子たち、家庭秩序に過剰に適応している良い子たち。もしかしたら国家的秩序に過剰に適応している若者たち。実は昨日、学生と大喧嘩したんです。「心のノート」、ここに出ている方はどういう代物かわかると思いますが、文部科学省が、日本の小中学生に7億3千万円の金を使って「心のノート」を配付して、現場は使っているかどうかわからないですが、河合隼雄さんが相談相手でつくられたという本のように。それを学生たちに読んでもらってレポートを書いてもらった。半数近くの学生は「これはいいことが書いてある、こういうノートを時々見ながら自分を振り返り、自分をただすことができればいい」と書いてあって、私は幾分か頭に来て「じゃ、君は教師になってこのノートを生徒に実際に使わせますか」。空欄があって書き込みがあるんですが、「ノートに実際に君が書かされたとしたら君は書きますか」。何人かの学生は「そんな先生になりたくない」とか言うんですけど、「それじゃ、最終結論は偽っているんじゃないか」と挑発しすぎたせいか真面目な学生で怒りだしたのもいて、「先生の授業はまっとうな授業をいつも壊す」と怒りだして、一時間結構楽しかったんですが。

私の経験では大学で、ほぼ50年近く教員をやっていますが、5年くらい前の学生は3分の2が、ほとんど批判したと思います。明快に批判したと思いますね。5年間で学生もずいぶん悪く言えば、大人になった、学校適応過剰になったなと思います。最後は捨て台詞でこう言ったんですね。「学校過剰適応のような君たちは先生にならないでくれ。ほとんど教師が子どもたちを殺すよ」と捨て台詞を言って、あと半年、どう授業しようかと思って迷っていますけど。そういうと

ころにも良い子たちが現れている。

じゃ、良い子って何だろう。良い子、悪い子、普通の子、家庭に十分大事にされなかった子ども、家族的な親密圏をもともと持てなかった子ども、その中で安心して暮らすことができなかつた子ども、人に身体を委ねながら生きていくことを覚えなかつた子ども、虐待の中で常に一番親密な親に暴力を繰り返し続けられてきた子ども、虐待とネグレクトの中に晒されてきた子ども、家庭崩壊の中で育ってきた子どもの問題はまた深刻な問題で、これはこれでまとまった議論をしないといけない。会場に参加している藤木さんにあとで発言をしてもらおうとありがたいですが。

(3) 「餓鬼」を認めない大人社会一つ作られる「良い子」

今日は前の方の問題、良い子についてです。いくつか私の体験の中にあるんです。これは古いんですが、私の地域で中学校の教師と小学校の教師がある場で激しく争ったことがある。教師のサークルがあつて、親も参加していたんですが、小学校の先生は「小学校で良い子たちが皆、中学校に行くと悪くなる」と言ったんですね。中学校の先生は頭に来て「あなたたちは子どもが見えなかつた。この子はきっと小学校の頃からおかしいところがあつたはずだ。それが見えない小学校教員の方がおかしいのではないか」。こういう議論になつたんです。「中学校教育が悪いということ子どもがおかしくなつてきているという論を立てるのは、同じ地域で仕事をする教師の連帯に反するじゃないか」と中学校の教師が居直りまして、「ケーススタディをやろう」となりました。中学校で悪いといわれる子どもを一つ一つ丁寧に洗つていったら、「小学校で良い子というのが実はどうやら良い子ではなかつたらしい」という、そこで小中の教師の意見が幾分か統一し始めたわけです。これが一つ目です。

二つ目は「あの良い子がどうしてこんなことを」というコメントがつくような新聞記事がたくさんあります。それを私ははじめから疑つていたんです。だって「少年期の子どもで良い子なんているもんか」と腹の中で思つていますので。昔の大人たちは、だから子どもを「餓鬼」と言ったんで



あって、良い子は皆、「優等生」といって悪く見ていたわけで、優等生は地域に後ろ足で泥を被せて、自分だけ勝手に上昇していく連中であって、いつも民衆を裏切る奴が優等生だ。

子どもって本来、「餓鬼」であることを今までの大人が認めていたんで、良い子であることを親は心配したのではないか。いつのまに、こういう言い方になってしまったんだろう。「良い子がどうしてこんなことを」という驚き、今でもそういう言い方はありますよね。大人の子どもの見る目は支配的で許せないなという、そんなに良い子につくりたいのかなと思うんですが、実はその通りですね。

すべてそういうわけではありませんが、多くの中流階層の親たちは、小さい時からそんなに口やかましくはありませんよ。目つき、顔つきで、何をしたらいいかというメッセージは繰り返し、繰り返し伝えているはずですよ。近頃はあまり聞かれないんですが、小学校4年生くらいになると、子どもが凄まじい目つきで親をにらみ返し、「オバンうるせえよ」と言うようだという話が伝わった時期があります。今、そういう話がありませんね。もっと危機が深くなっているのではないかと思います。お母さんの中には「子どもに殺されるんじゃないか」と言って相談にきたお母さんもいましたけど。実際に子どもが親を殺すような話はあったわけで、もともと家庭内暴力は子どもが親に暴力を振るうのであって、親が子どもに暴力を振るうのではなかったんだよね、日本では。子どもがそれほどににらみ返さなければならぬほどに、親のちょっとした仕種が子どもに大きな影響を与える。子どもに支配力を持っている。

当時、日本子どもを守る会が「子どものしあわせ」という雑誌を出し、今も出ています。民主的な子育て、子どもに理解のある、子どもとともに生きるような親でありたいというメッセージを発信し、この雑誌は5万部以上出たんですね。私は人が悪いので、「こんなで育った子どもはだめだよ、漂白されて悪の臭いのないような子どもはそのうちだめになるよ」と言っていました。こんな子育てを言うのは大人の自己満足であって、絶対にいい子どもは育たない。

(4) 自分をナマで出すことを許さない力一選択肢で追い詰める

大人なんて、しばしば子どもに足蹴にされるくらいの方がいい。でなきゃ、子どもは大人を乗り越えて新しい世代として育つわけがない。何もかも大人がいいことづくめの話をして、子どもが反論できない時には「うるせえ」と言って暴力をふるうしかしようがない。すべてが正しくて、でも納得いかない時に子どもというのは暴力を使う。親が丁寧に「こうしたら、ああしたら」と言う。「これを飲みた

いの？ ジュースにする？ アイスクリームにする？」と、親が子どもにいろんな欲求を聞く。要求を引き出そうとするような親に対して子どもは何と言うか。「別にいい」。これは暴力の始まりなんだよ。「うるせえ」とまだ言えない、だから「別にいい」と言う。つまりいろんな選択肢を出されること自体が「もういや」と言っている。それでもなおかつ、いくつもの選択肢をだして追い詰めてくると「うるせえ」と言うしかない。「俺は何も選びたくないんだ、今は。ましてあんたが並べる選択肢なんて、一つとして選びたくない。うるせえんだよ」。こういうことになりますね。

だから親の子どもに対するさまざまなかかわり方は、本に書いてあるような教育ママというのが一番手ごわいのかもしれないんだね。強制的な親の方が手ごわくないですよ。正体がわかるから。喧嘩すればいいだけなんです、子どもからすれば。ところが抱擁してきて抱きしめて、窒息させるような親が一番困るんだよね。さらにこういうものもあります。親か子どもに期待をかけていて、それに応えないと親が死にそうになってくる。イライラして親が辛い顔をしている。こんな親も困ったものなんです。子どもは親の言うことが正しいから聞いているのではないんです。親が落ち込んでいくから、親の言うことを聞いている。教員の子どもの中でお母さんが凄まじく忙しくなっていくと甘えることをやめる子どもが結構たくさんいる。そして学校であった辛いこともしゃべらなくなる。そういう子どもは結構います。そういう子どもの中に登校前腹痛になる子どもが多いんです、経験的に言います。統計的に調べたわけではありませんが、自分をナマで出すことを許さないような力が子どもの中に働いていく。また不幸なことに、そういうことになる子どもがいるんです。

マモルという子は今は30いくつですが、地域では校内暴力期の神話的人物として、バイクで校舎を1階から5階へと走り回ったという子どもです。当時「ルート20」という暴走族の親衛隊長になった子どもです。今でも大変な子どものことがあると「おい、マモル、あの子らにちょっと何か言ってくれないか」と頼みます。「すぐ俺を利用するんだから」と言ってます。長い間、産廃のトラックの運転手をやってきましたけど、3年前にやってきて「先生、この仕事をするのをやめた。だってさ、捨てる場所がない。産廃を持って日本国中一週間くらい走らないといけない。俺は法律違反はもうやりたくない。捨てられるところを探して走っているけど、もうない。これで生きていくことはできないので、俺たちそば屋になるわ」と言って、そば屋になったんです。中卒ですので、立ち食いそば程度しかできないんです。資格試験が高卒でないととれません。それでもしっかり生きてます。

この子の場合、後でわかったんです。お母さんは実は父親に育てられた。1歳の時から父親が育てている。するとね、母というものはどのように子どもにかかわるかという自然体がないんですね。どことなくない。すべて頭に還元して子どもとかかわろうとする。気がついたら育児書が山ほど積んである。こういう時はこうするとマニュアルを調べている。「小さい時からこれを読んで子どもとかかわってきたの?」、「そうです」と言うのです。僕は13年間、子どもを保育園に連れて通いましたので、いろんなお母さんたちを知っています。野放図で、ずぼらなお母さんを紹介して「いかに親というのは、手を抜くかということ学んだ方がいいよ。そんな簡単に太っ腹母さんになれとは言う気はないけど、親はどれだけさぼっているか、あのお母さんと付き合っているうちに覚えた方がいいよ」と言ったことがあります。そういう形で、ある圧力がかかる場合もある。

さらには家庭にトラブルがあると、当時、こう言いましたけど「影の主婦」になる子どもがいるんですよ。『影主婦』と言いますけど。トラブルが吹き出しそうになると、最初は良い子になって、トラブルをつくらないようにするんだけど、さらに強くなってくると自分が笑いをつくるような人物になっていく。緊迫した空気を和らげようとする。凄まじい努力をする子どもがいる。「親のことで相談にくる子どもがいるんですよ」と聞いて、そうだろうなと思いました。相談には来ないけれども、一生懸命、夫婦や、親とおじいちゃん、おばあちゃんとの間をとりもち続けて、遂に疲れて果てて不登校になった子どもをたくさん知っているんですね。少なくないんですね。

ファミリーダイナミックスの緊迫感に飲み込まれてしまって、その中で自分を出せないで、人にばかり尽くしているうちに。これは良い子ですよ。間違いなく良い子だと思うけれども、自分を出せなかったという面では困った子どもだよ。だから家庭適応過剰になるというのも、教科書に書いてあるような教育ママの話ではないんですね。どこかで私たちはそういうふう子どもをある家庭的な秩序、ありように過剰に子どもを適応させてしまうような力が働いているのかもしれない。これは何者かを見つけないといけない。お母さん、教育ママが心掛けを変えれば変わるようなものではないんです。

(5) 学校が持っている隠れたカリキュラム

親たちは凄まじい、今日の場合も昔も必死に子どもを競争社会の中に押し出していくような力をつけない限りは、子どもは生きていけないのではないかと、一つ狂えば中流の私たちの家庭なんてものは吹っ飛んでしまって、ガラス一枚下は地

獄だと思っている親はたくさんいます。今もそうですよ。日本の生活の安定なんてものは、たかが知れたものです。さらには今、すでに波の中に飲みこまれていって、「子どものことなんか考えられないわ」という人もいるわけですから。ことはそれほど、人の心掛けで決まるのではないですね。切羽詰まって生きているからこそ、目つき、口つき、顔つきに出てくるわけです。子どもへのある思いが。優しい子どもほど、これを受けとるんでしょう。しかし子どもの発達にとってはいいことではないんですね。そういう子どもほど、学校へ行くと、学校的秩序に早く過剰に適応するんですよ。学校的なある生き方というものを見かけの過剰どころか、子どもの魂にまで入ってきている。心にまで入ってきている。「心のノートはいいですよ」と言う学生は、まさにやられてしまっているなどという思いを持ちますけども。

だからそれほどに、学校というものには隠れたカリキュラムがあるんですね。国語、算数を教えるのは表のカリキュラム。教えながら、ある事柄を学校は強烈に教えている。学校の建物や座り方自身が、すでにある生き方、行動の仕方を仕掛けていますね。だから学校というのは恐ろしい。それを9年どころか12年も学校の中で暮らすわけです。学校の持っている秩序、見えない規律、そういうものは凄まじくあるわけです。否定しがたくあるわけですね。もしかしたら、先生方に辛いことかもしれないですが、私も辛いなどと思っていますけど、学校なんてものは、知識や技能を習得することを権力者は期待していないんじゃないでしょうか。学校という牢獄で12年間、働けば、使いやすい人間になる。日本の学校には、特にそういう傾向がありますよ。

戦前から、日本の学校は、一年間真面目に学校に通っていけば、出来不出来に関係なく進級させてくれるんですから。日本の学校社会は天皇制社会であったわけですから、一年間学校に来ていたらいい天皇の子どもになるということで、学年進級の学校をつくったんです。日本の学校は子どもに学力保障するような学級の生徒数で、日本の政府はつくったことはないですよ。今だってつくる気はない。本当に学力保障するつもりなら、せめて25人くらいの学級にならないといけません。それを明治以来やっていないということは何ですか。学力保障義務を政府は持っていると思っていない。だから9年間、12年間、学校という仕組みの中に子どもを囲い込んでおけば、一番こっこの都合のいい人間になる。これは日本の政府だけではありませんよ。義務教育を認めた時の論争の中に、すでに明快な意識を持った支配者がいたわけです。

(6) 強迫性を持つ学校適応過剰の子ども

そういう中で、子どもたちは学校の中でさまざまな秩序に従えば従うほど、学校に過剰に適応する。どういう子かというイメージについて、一つの例として、小学校の3、4年生くらいだね。先生が何もしなくても学級を仕切ってくれる女の子の3人くらいのグループがいれば、教師は楽なもんですね。教師よりすごい監督者が3人いて、男の子なんか、目も当てられないね。徹底的につるし上げられる。学校適応過剰の女子の例、女子を悪く言うのは困るんだけど、これは一つの典型ですね。

これだけではありません。さまざまな形で現れてきますね。○×の算数をやったら一番先に、黒板に行きたがる子ね、自分より早く行く子がいたら、足を出して倒しても乗り越えてでもいこうとする子ね。いますよ、今だって。そういう子は研究授業に行くと、後ろから「蹴りたい背中だな」と思うことがありますけど。大学でも、点数のつけ方にかかなり粘り強く異議申し立てをする学生がいます。いろいろですね、この頃の学生もね。昔と違って、こまかなことを言う学生もいまして、それだけではありませんよ。そういう子どもたちが多くなってきて、トラブルと親を連れてきて大学乗り込んでくるという。「私は消費者なのにあなたはなぜ、ちゃんと私を扱わないの」と言いかねない学生もいます。

そういう子どもたちがね、何かというと、学校適応過剰の子どもは知らずして、ある強迫性を持っていると思う。たとえば、強迫的であるということは、人間は生きている限り死ぬんだよ、死ぬ限りにおいては死ぬという不安はいつも人間の中にある。これを見ないように何とかごまかして生きていくのが普通の人間の姿かもしれませんが、死ぬということについては決まったことなので受け入れるしかしようがない。仲良く生きていくしかしようがないと考えるのか、限りなくこの不安を逃げるために別のことにこだわっていくのか。不安から逃げるために、あることにこだわり、とらわれ、溺れ抜いていくような傾向を、強迫性と言えると思います。学校適応過剰の子どもの特徴、落ちこぼれることへの不安から学校の表の成績と学校の裏の秩序に激しくこだわるわけですね。そういう不安を子どもの中に産みつけた大人がいるんだよね。私は人が悪いからよく聞くんですね、東大の同期の学者に。「あんたね、試験で悪い点数をとったとか、落第したとか、就職試験でだめになったような夢をいつ頃まで見た？」と言うと、「竹内は嫌なことを聞く」と言いますが、大体皆、一般的には言いませんけど、40歳近くまで見ていますね。僕の同期の東大生は、「40歳過ぎても見ると」というのもありますが、大体、そのへんで手を打つことができるようになったかなど。

これも教育することの怖さを示している話だと思いますね。大学に来る人はたくさん試験を受けているんです。試験は他人の眼差しの中でモノとして扱われますか

ら。そうでしょ、客観的に言えば、これほど辛いことはないんだ。人に一方的に値踏みされるということは、これは辛いことです。試験のあり方は根本的にどう変えるか真面目に考えないといけないのですが、しかもそれで自分の運命が変わることになるのは、勉強のできる偉い方が、そういうことになる。だから日本の官僚やエリートはなぜ、人間的に弱いかという、まさにここに僕はあると思うんですね。日本の上層階層の人は根本的に弱いですよ。本当にいい意味での頑固さはない。頑固な精神は持っていない。そこを変えない限りは日本でエリート教育なんかできませんよ。今、エリート教育をしたい人がたくさんいますけど。

(6) 強迫的な子どもの二つのタイプ

でも強迫的な子どもの中には、二つのタイプがある。一つは限りなく自ら進んで学校的な秩序に従う。かなり構造的に従う。強迫的パフォーマンスと言いますが、優等生などは強迫的パフォーマンスですね。もう一つは黙って学校秩序に限りなく従っていく、強迫的黙従者。昔、こういう子どもと出会ったことがあります。学校の先生はある子どもについて、「もう2年以上になるけど、掃除をさぼったことがない。なんといい生徒なんだ」と言うわけです。僕はね、「あんた子どもを見る目がないの？ 卒業するまで掃除はサボらせなさい」と言いました。掃除をさぼったことのない高校生なんて、日本中にそんなにいないよ。いることの方が奇跡だと思って、それをいいことだと思ってはだめ。

だけど卒業して就職して大手企業の工員として模範工員になったんです。「竹内さんの言い方は間違っている。ちゃんと世の中で生きているじゃないか」と言われました。僕は時々余計なことを言うものですから。ところがね、結婚したんですね。結婚式を挙げて飛行場で泊まったその夜に投身自殺しました。彼はロボットだったんだね。生身の人とつきあった時、彼は死ぬしかなかった。生身に帰れなかったと僕は密かに思っているんです。その学校で「あの子がどうして自殺したんだ」。底辺高ですから、大手企業の模範工員になるのはサクセスストーリーですよ。その子どものことを使って在校生たちに先生たちは言ってきたんです。それが自殺をしたので衝撃的だったんですね。

その学校で言われたことは、「なんでそんな変な考え方持てるんですか？」でした。「俺は教師でないからだよ」と言いましたけれども、これは明らかに強迫的黙従者ですね。結婚すると、お互いに主体的な人間としてかかわらざるをえないでしょう。どんなに受動的に結婚したって、これはむりです。身体的にかかわるんですから。性的にかかわるわけですから、本質にかかわることですよ。言われた

通りにやるわけにいかんわけです。彼は生きられなかったんだと思います。

この二つのタイプは何かと言いますと、逸脱論では、こういうのを体制内逸脱と言うんですね。体制の中心部に向かって限りなく逸脱していく。変な日本語ですね。わかりやすい例ですが、タバコを吸っていた頃、吸い出そうとするとパッとライターをつけてくる学生に「ふざけんじゃない」と怒ったんです。「お前、そんなことして生きるつもりか」って。一つの例で言えばね、「そんなことを礼儀だと思ってちゃ困るんだよ」って。「そういうふうに君は自然と身体が動いたことは恐怖だよ」と。これは体制内逸脱の一つの例でしょう。限りなく体制と屈伏し、進んで屈従し、自分の内側のさまざまな思いを切り捨てていく、徹底的に切り捨てていく。

(7) 小学校高学年までの選抜体制—子どもの中の支配的な他者

関西の研究者で野田正彰さんがいます。優れた社会精神医学の仕事をされていますが、野田さんの最近の著作の中に「あれだけ人を殺してきてトラウマにかからなかった日本人兵士というのはなんだ。日本の兵士はもしかしたら世界最強野兵士だった」というくだりがあります。多分そうだと思います。ベトナム戦争ではアメリカの青年は限りなくPTSDになったわけです。イラクでもそうだと思います。日本の第二次世界大戦をやって来た兵士たちは、隠れてところでPTSDになった人がいるだろうと思いますが、社会現象としてPTSDは表に出たことはありません。野田さんは、それを掴まえているわけです。PTSDにならない日本人のパーソナリティは何か。こういうパーソナリティを生み出した日本の学校とは何か。

だから私は教育学者として問われているんですけども、答えられないです。どう答えていいか。答えの一つは今の話の中にあります。これは私の問われる前からの一つの回答です。そういう生き方をしていけばいくほど、そういう生き方では生きられなくなるんですね。生きられなくなる典型的なのは、選抜試験の第何ラウンドか知りませんが、8ラウンド目が、ほぼ終わるのが小学校5年生頃でしょうね。選抜体制は小学校の高学年でほぼ決まっているんですね。

最初決まるのは音楽ですよ。ピアノをこれから続けていくか、いかないかは小学校高学年でほぼ決まりますよ。ピアニストになる人とならない人、趣味でやる人は音楽はやめる。野球だってそうです。シニアに入って野球をするか、中学校の野球部に入ってやるか。クラブをやめて他の競技をやるか。私はある時期、10何人くらいの子ともつきあっていたことがある。家庭裁判所の調査官を10数年教えていましたので、それとのかかわりで、そういう子どもたちとの付き合いが始まったんですが、気づいたら十数人の子とも全員が音楽くずれ、野球くずれだったんです。

衝撃的だったですけど、優等生くずれはまだその時はい wasn't でしたね。でもきっと、続いてくるのは学力における選別でしょうね。そういう中で子どもたちはどんどんと否定的に評価される中で、抱えていた不安が子どもの中から吹き出してくわけですよ。こんな不幸の中で俺はもう生きられないよ。いや、そこへ行くまでに限りなく子どもは自分を責めるんです、責めて責めて責め抜くんですよ。単に心の中だけで責めるんじゃない、身体的にも責めるでしょう。だから自傷行為を起こすんですね。ちょっとした間違いで、自分を痛めつける子どもが増えています。『子どもの自分くずしと自分づくり』を書いた頃よりもっと増えていると思います。

しかしこういうことで生きていくことは辛いので、「自分をここまで追い込んだのは誰だ」という問いは出てくるでしょう、否応なく。それは具体的な誰ではないんですね。親であったり、教師であったり、家庭という仕組みであったり、学校の体制のあり方であったりするようなものが自分の中に入り込んできて、自分の中の支配的な他者をつくった。何か自発的に、自主的に何かしようとする、私たちの中に、ギョロッと目を剥いて、その心と言いますか、その思いを無視してしまう仁王さんみたいな目つきをした嫌な奴がいるよね。それは小さなことでもあります。

(8) 思春期と思秋期一時代の危機が重なるころ

私は大学で管理職をやっていますので、國學院大學は天皇の典籍を調べる学校ですから「君が代」、「日の丸」は私が就職した時からあり、式の時は必ずします。私は文学部長で、隣の学長は「日の丸」に向かって「君が代」を歌う。私は学生の方を向いて歌わないでいる。そういう時は私の身体は総じて揺れるんですね。歌おうとすることに呼応して、フォーマルであるどころか、ますますインフォーマルに。今でもそうです。きっと私の横に来て「きをつけ」と言ったら中指の内側の腹はズボンの線にピタッとあたるかもしれませぬ。そういう場面に行くと私の身体は揺れるんですね。いや、ツツパリの身体が揺れるのもよくわかる、僕は、あいつもやるとるわ、必死に耐えてるんだ、彼らもと共感することがあります。真面目な先生は怒るんだよね、「なんだその態度は」。私も「なんだ、その態度は」と言って殴られたこともありますけど。身体が揺れすぎて。

そういうような場面ですね。歌わないでいることの怖さというものは、東京の教師たちは今皆、経験しているんですね。だからそうしなくちゃならないけど、そうすることの辛さ、そうはできない自分がある。現にいるこの自分が生きられる道はあるんだろうかと、今皆が考え始めている時期だと思います。どこかで、そういう小さな子どもたちのさまざまな事件の中で、実は世の中の問題が子どもたちの中に

ドボツと入っているんだよね。子どもたちがさまざまな問題を起こすことの中で、親たちもどこかで感じ始めている。子どもが思春期でいけば、親たちは思秋期にいるんだよね。もう一度、生き直したいという思いがある。女の人ほどある。「もう子育ては終わったんだ、あとは私の人生よ」というふう生き方を変えたい。これは一つの危機ですよ。思春期と思秋期が重なりあい、そして時代の危機が重なりあうところに、今大人と子どもが一緒にいるわけで、これが出会えないはずはない。きっと、出会える道はある。それが簡単には見つからないで、私たちは困っているんですね。

春日井： どうもありがとうございました。

パネル・ディスカッション

春日井： 今日のパネラーは竹内さんに加えまして石澤さん、池添さんをお招きしています。はじめに石澤さんに話題提供をお願いいたします。石澤さんは、京都市立正鳳小学校にお勤めで、30年余りの教職経験を持っておられます。現在は小学2年生の担任をされています。それではお願いいたします。

石澤雅雄： 竹内さんが「心のノート」について話されました。続いて私は、あの「ノート」に書かれた子ども像が、いかに教室で日々接している現実の子どもたちと離れているか、リアリティがないか、ということについて話したいと思います。子どもの作文が大好きですので、いくつか作品を引用しながら話したいと思います。

「心のノート」の1・2年生用を見えます。「気持ちのいい一日」というタイトルのページを開けてみます。そこにはきれいなイラストで、次のような「よい子」像が描かれています。朝、元気な顔で起きて、朝食を両親とともにこにこして食べ、友達と語りながら学校に行く。授業では騒がしくならないように意見のあるときは「ハイ、ハイ」などと言わず、口を結んで黙って手を挙げる。家に帰ったら翌日の時間割を合わせ、寝る前には両親の前できちんと両手を前にそろえて立ち、頭を下げて「おやすみなさい」と挨拶をする。いかにもりっぱな「よい子」が描かれています。でも、これが子どもなのでしょうか。

私は、作文を書かせるのが好きですが、子ども達と絵本作りをすることもありません。こんな絵本を作った子がいました。

「先生がテレビを見ていると、おくさんが『さんぱつに行きなさい』と言った。先生は『はい』と言った。（子どもってすごいですね。わが家の夫婦の力関係をちゃんと見抜いています。）先生はさんぱつに行くと、『かっこよくしてください』と言った。先生ははげになって、『オーマイガッド』と言いました。先生ははげになってがっかり、トホホ。家に帰ると先生のおくさんが言いました。『何なのよ、そのはげは』『ごめんなさい』『あなたって人は』と言って、先生のおくさんは先生のおかおをペシンとたたきました。先生はふられた。おわり。」

それだけの話ですが、この絵本は教室で引っ張りだこになりました。ほかにも、「先生が学校できもだめしをしてきぜつした話」とか、「先生がゴリラにパンチされた話」とか、いっぱい書いてきました。きっと私がいつも先生面していばってばかりいるものですから、絵本の中でちょっとこけにして笑うって、面白いんでしょうね。

もちろん私はこれでも先生ですから、「人のことを『はげ』なんてバカにするものではありません。バツとしてこんどは『かっこいい先生』という絵本を書きなさい。」と言うのですが、さっぱりききめがありません。しかたがないので、わたしが自分でそういう絵本を作ったのです。「かがみよかがみ、世界中でいちばん美しいのはだれ？それは石澤先生……」と読んでやりますと、これまた大笑いになります。

子どもってそんなもので、もちろん勉強や掃除も一所懸命がんばってやる子ども達ですけど、いたずらやわるさもまた大好きなのです。

「きょう、ともくんと、あすかくんと、てつおくと、たつくんと、ぼくと、しんやくんで、つかまえるごっこをした。おには、あすかくんとしんやくんで、こじろうはにげまくって、こじろうはともくんとたつくんで、トイレにかくれました。ほんで、トイレから出て、てつおくんにあって、おにがきて、またトイレに入って、てつおくんが「きしよい。」ってゆった。こういちが、「つかまえていいのか。」ていったら、トイレにはいらはった。そして、ともくんとたつくんは、おににいるか見はって、こじろうとてつおくんは、トイレにいたけど、おにがきたてゆわはったから、トイレ



にかくれて、かぎしめた。そしたら、ともくんとたっくんははいはいへんかって、ともくんとたっくんが、となりのトイレにはいつて、あすかんとしんやくんがきて、こじろうやらがいるとこばれて、こじろうやはトイレにとじこめられて、おにこうたいになった。……」

トイレは遊ぶところではない、と教えてやって、そのときは神妙な顔をして「はい」と言うのですが、次の瞬間にはこりずにまたやってる、またつかまえて注意するのですが、子どもってそんなものだと思いつきあってるわけです。

もう一つ、子どもは健気に生きているという面もみてやらないといけな、そういう作文を読みたいと思います。「お母さんのねつ」という作文です。

「学校が終わって家に帰ってインタホンをおしても出なかった。それで、自分のかぎでじどうドアをあけたら、家に入って、お母さんがねつ出てたから、よるにびょういんにいかはった。それで、けいこおにいちゃん、テレビを見てた。「お母さん、おそいな。」とけいこが言ったら、おにいちゃんが、「キャラメルいる人、手をあげて。」と言って、けいこは、「はい。」と言った。それで、キャラメル二つ食べた。それで、お母さんが帰ってきて、「ごはん食べたか。」ときかはった。けいこは、「まだやで。」と言って、自分たちで作った。それで、おにいちゃんになかされて、自分のへやにいってないた。それで、ごはんができて、食べました。」

お母さんが風邪をひいて病院に行く。おなかがすいてくるので、お兄ちゃんがキャラメルを見つけて、ほしい人、手を挙げてと言う。それを食べる。お母さんが帰ってきたけど、ご飯は自分たちで作った。お兄ちゃんとけんかになって泣いたけれども、いっしょに食べた。そういう暮らしの一コマを書いています。「けんかはいけません」とは言うのですが、子どもは人間関係の作り方がまだ未熟です。何か積極的に行動しようとする、たがいの思いがぶつかり合って「けんか」になることだってあるのです。むしろここは「けんか」をしながらも、病気のお母さんに変わって兄妹がいっしょにご飯の支度をするを、「健気」と読むべきなのだと思います。

こんなふうに、毎日、子どもの作文や日記を読んで子ども達と接しているものからすれば、「心のノート」に描かれた「よい子」像は、どうみてもリアリティに欠けます。こんな子どもなんて一人もないよ、というだけでなく、子どもって本質的にこんなもんじゃないよ、と思われるのです。どうしてそう思われるのでしょうか。それは、「心のノート」を作った人たちの、子どもの「わるさ」についての理解の欠如と、現実の子どもが健気に生きているということの理解の欠如が大きいように思えます。子ども達ひとりひとりが、日々どんな暮らしをしているか、どんな

思いで生きているか、現場の先生たちはそういうことにもっともっと目を向けないといけなのに、「心のノート」は、「よい子」像を子ども達にあてがうことでこと足りると思わせてしまい、逆にそういう本当に大事なことに目を向けなくさしてしまう作用をするのではないかと心配します。ますます多忙になってきている学校現場で、一人一人の子どもにちゃんと目を向けて仕事をするのは大変困難になってきていますが、子どもを育てることを仕事とするものが、子どものことを知らないでは何もできません。微々たる力であっても、そこにこそ自分の力をそそぎたいと、日々自分に言い聞かせながら仕事をしています。

春日井： ありがとうございます。子どもたちは悪さをいっぱいして怒られて、でも許してもらいながら、その中を健気に生きているわけです。そんな子どもたちのリアルな姿とどう向き合っていくのか、絵本の実践も含めて報告をいただきました。

続きまして池添素さんから報告をお願いします。池添さんは長く京都市の職員をされ、現在は子育て支援、コミュニティ支援を目的にした「らく相談室」を開設し、室長をされています。本学でも非常勤講師としてお世話になっています。全国障害者問題研究会副委員長も勤めておられます。

池添素： 竹内先生のお話を伺っていて、私に求められていることは「少年期の不在を問う」ということで、少年期に至るまでの乳幼児期の子育て、親の立場での今の現状、問題点や今の様子を話すようにということではないかと思います。

「らく相談室」は、白梅町にあります。民間で、3人のスタッフといろんな方に助けていただき「専門性は強力なネットワークとコネクションです」というのがウリです。相談室を始めて10年がたちます。1年間で100ケースですから、ほぼ1,000ケースかなと思います。1回限りの方や何回も来られる方もあります。竹内先生から子どもが親の相談に来るといった話がありましたが、障害をもっている子どもの親御さんの発達相談、子どもの発達をみるとか、療育をすることが多かったんですが、だんだん年齢が上がってきて、学童期、青年期、成人期と年齢が上がってきています。キャッチフレーズは「子育てについての悩みの相談にのります」ということで、とにかく一人で悩んでいないで、相談してください。子どものことだったら、児童相談所に行けばいいんですけど、児童相談所に行くにはハードルが高い。悩んでいる間に、子どもがどんどん問題を起こしてくれる。それやったら一人で悩んでないで話してみてくださいと話しています。建物もそうですが、問題の

バリアフリー、年齢のバリアフリーと思っています。

その中でたくさんのお母さん、お父さん、最近はおばあちゃんやおじいちゃんたちが相談に来られます。もう一つは保育園に巡回相談に行っています。年間200人の子どもたちを保育園で見っていますが、そこで聞く保育士からの話、子どもたちの様子、そんなところから私が感じている乳幼児期の子どもたち、子育てのことに話をしたいと思います。

先程、強迫的な自分づくりという話をされました。あ、これもらったと思いました。これからお話する子育てのことは、一言で言うと、強迫的な子育てと言い換えてもいいのではないかと思います。はじめに、「残している乳幼児期の発達の宿題」について話を進めます。子どもたちはどんどん大きくなっていきますが、本当はその必要な時期に必要な発達をして、そこをクリアして大きくなっていくといいんだけど、本当にその時期に獲得しなければいけない発達の中身を獲得しないまま、大きくなっていくように感じます。子どもたちのあたりまえの姿だと思うんです。身体はどんどん大きくなってきます。力もついてきます。でもちょっとその前に忘れてきた宿題は、大きくなるとだんだん解消していくのではなく、ずっと残っていきます。残した発達の宿題は「大きくなってもやらんといかんよ」ということでしょう。第一、学校の先生は「宿題をやらんといかんよ」と言わはるでしょ。お母さんも言っているでしょうと。発達の宿題を残して育てている子どもが多いなと感じています。

その一つ目は、自分の気持ちを出して、それを受け止めてもらう大人とのかわり。これを十分してもらっていない。年齢的には1歳半から2歳くらいの時期のことなんですが、現象的には「いやだ」「自分で」とか親を困らせてる時期です。子育ての一番目で最大の危機だと思っているんですが、ここで脅迫的な子育てがむく



むくと顔を出します。なぜならば、子どもが言うことを聞かないんです。「どうしたら言うことを聞くでしょうか」という相談はほんとにたくさんあります。「子どもはいくつ?」と聞くと「1歳半、2歳」。その頃の年齢を言われます。「聞かなくてあたりまえやん」と思われると思います。でもお母さんた

ちは「こんな小さい時期から子どもが言うことを聞かないと大きくなったらもっと聞かなくなるんじゃないか。今の時期にちゃんと言うことを聞かさなきゃ」と思います。子どもからすると待ってもらえない、選ばせてもらえない。「自分で」というのを待ってたら時間がかかります。教員の子どもは、という話をされましたが、待ってもらえない子どもの親の職業、一番目は、経験的ですが、看護師さんの子どもが多い。2番目は学校の先生、3番目は保育士。どの職業もとても忙しい仕事で、もう一言付け加えると大義名分がつく仕事。「お母さん、お仕事」「お母さん、どうしても学校にいかないかん」。大義名分が立つ仕事かなど。待ってもらえないしんどさ。そして選ばせてもらえない。この時期は弱い存在です。いくらでも力で大人の言いなりになります。決して言いなりになっているのではなく、ならされているだけ。それが大きくなった時、必ず宿題として出てくると思っています。宿題を一生懸命している子どもたちと、よく出会います。

二つ目は、自分への自信をもつ、自分が大好きの人とのかかわり。これは4、5歳の頃で、この時期になると、できないことが目立ってきます。5年生くらいで音楽とか野球をやめるという話が出ました。このことが苦手とかできないとか、そうすると少しでも大人は、「できないことをできるようにさせて自信をつけさせてあげよう」と思います。そしてできないことを頑張らせます。小学校1年生になった子どものお母さん、声を揃えて言われます。「先生、小学校の1年生の運動会って、スカみたい。年長の運動会、あのしんどさは何やったんやろか」。竹馬、縄跳び、逆上がり、年長で最後のまとめやから先生も気合が入っているし、親も頑張ってもらいたいというので子どもはへろへろになっています。1年生は、リレーとダンスしかなかった。「なんやものすごく楽しかった」。保育の方の課題があるなど思っただけで聞かせてもらいました。

できないことばかり指摘されると自信を失います。この時期、一杯、いいところ探しをしてあげてほしいなと思うんです。でもなかなかしてもらっていない。「あれができていない、これができていない」。できるようにすることで「それは子どものためや」。よく運動の苦手な子どもはスイミングや野球に入ったり、サッカーに入ったりして忙しい生活をしています。苦手なことを克服するのは、そんな簡単なことじゃないと思います。

この時期、自己肯定感をもてる子どもが少ないと言われていますが、この時期、ぼろくそに言われていたら、自分のことを好きになったり、自分に自信をもつなんてできないなと思います。この時期に大人からいいところ探しをしてもらって、自分に対して自信をもてると、その後、きっといろんな危険なことにてあったり、人

生を左右するようなことに出会った時に、この力が生きてくるのではないかと思います。

三つ目は、自分は信頼されていると感じられる大人のかかわり。これは思春期の頃ですが、「したらあかんよ」と100ぺん言うよりも「あんたのことを信頼してるから」と言う方が効果があるなと思います。そんなかかわりを子どもが大人からしてもらえたら、発達の宿題を少しずつ克服して、力をつけて自分をつくっていくのではないかと思います。

そして今日、一番言いたかったのは、大人は子どもの見えるところばかり見ていないだろうか。学校に行ったら「うちの子、学校に行ってる」と安心する。でも学校でいじめられているかもしれない。「友だちが一杯いる」。でも家で皆、違うゲームしているかもしれない。その中で凄まじい権力闘争があるかもしれない。「うちの子、成績が上がってる。下がっている」。見えるところばかり見ていると、本当に裏側にあるものが見えなくなってしまう。その最たるものが子どもを生むということと育てるということの違いではないかと思います。お腹が大きくなってきて、子どもを産む、それは見えることです。でも子どもが育っていくことは見えないことと一杯付き合わないといけない。子育て情報誌に書いてないことと出会います。子どもにこうさせたから、できるのではない。させなかったからできないのではない。子どもは自分の力でやりたい。

子どもはどこを見てほしいのか。行動の裏側。子どもは「なぜそんなことをするのか」を感じてほしいと思います。そして言葉の裏側、これはカッコよくいうと「心の声を聞いてほしい」と思うのですが、もっと具体的に言うと、石澤先生が読まれたように、小学校2年生、そんなにうまく表現できないですね。子どもの話は無茶しんきくさいです。何が言いたいかわからないこともよくあります。辛抱強く聞いて、やっとわかるということもあります。それをくみ取ってあげる大人側の力が必要です。生活の裏側、子どもはわりと「仕方がない」と諦めていることが多いのではないかと。そのことを見てほしい。「ちゃんとやっていることを見てほしいよ」と思っているような気がします。

子どもたちの問題を考える時に、大人の中にこそ解決の糸口はあると思っています。自分が子育てする時のモデルは、自分がどう育てられてきたか。それから逃れられることはできないと思います。その意味で、大人は自分の育ちの中でしか、子どもと出会えないと思っています。だから私たち自身が、子どものしんどさを感じた時、子どものサインを感じた時、自分の育ってきたプロセスを振り返ってみること、そこに糸口があるように思います。

最後に子どもたちが安心できる人、時間、場所、これが一番子どもたちにプレゼントしてあげたいことです。子どもたちが安心できて、ほっこりできる、いつも早くなさいと言われてたり、いつ鉄拳が飛んでくるかわからないところでは安心はできません。子育ては子ども育てではなくて、次の世代の親育てです。今、私たちがしている子育ては、その子どもが子育てをする時の紛れもなくモデルになるはずですよ。子どもたちの安心を、今、大人たちがいろいろ知恵を集めて、つくってあげたいなと思っています。

春日井： ありがとうございます。自分の気持ちを受け止めてくれる大人、自分のいいところを探してくれる大好きな大人、信頼してくれる大人とのかかわりの意味を話していただきました。後半の話の中で大人は自分育ちの中でしか子どもとは出会えないという大事な指摘もありました。



竹内さんは最後のところで、思春期の危機と思秋期の危機を抱えている子どもと大人は出会えるのではないかと言われました。池添さんの話の中にもそういうくだりがありました。石澤さんの実践スタイルにも、そういったものが底流に流れていると思いますが、竹内先生が言い足りなかったところやお二人の報告に対してコメントをいただければと思います。

竹内： 先程お話をした中で「タイトルについて何も言っていないじゃないの」と言われました。「少年期不在の話はどこに行ったのか」と。そこを話しておきます。少年期というのはいろいろ言い方はあるんですが、ある人は「少年期は安定したい時代だ」という人もいますが、別の人は「少年期は中間反抗期で、第一次反抗期と第二次反抗期の中間にあって、ここを通りながら子どもたちは大人から自立していき、仲間の中で生きようになるんだ」と言うんですね。そこでごく簡単に三つの視点から述べておきます。

一つ目は、身体論の視点から。少年期というのは、主体としての身体をつくる時代です。日本語はいい言葉で「思わず目が行く」「思わず手が出た」。これは英語で翻訳できないでしょ。日本語は人間の身体は一つの主体であるという思想を持っているのではないかと思います。身体の方が先に行くのが子どもなんです。いろいろ

る考えてやる子どもより、いろいろ考えて、やりたいんだけどやらないのが今の子どもなんです。先の先のところまで読んで、結局やりたいんだけどやらない。こうしたらどうしよう、あの子は何と言うだろうかなどと考えて不安に出会い、ついに自縄自縛となる。そうならないためには、子どもが自ら進んで身体の方から世界へ入り込んでいく必要がある。そういう身体は技を持った身体でないとだめですね。それは「文化としての身体」と、以前言ったことがあります。技を持った身体です。

学生にアンケート調査で、「あなたの少年期とつながる場所を書き、なぜその場所があなたの少年期を覚えている場所なのか」聞いたことがあります。年を追って、その場所がなくなっていくんです。だけど、少年期に何かあった場所に行くと、「あの時、こんなことを考えていた」、「あの時は、本当に悲しかった」などと思うことがあります。僕は、そういう場所を奈良にたくさん持っているんです。それが、地域開発で潰されると頭にくることがあるんですね。「俺の心の場所を奪った奴は誰だ」と思います。開発業者が住宅開発をして剥き出しにすると、「ふざけんじゃないよ」と腹がたつことがあります。

私たちは自然に帰っていく身体を持っていて、その中で確かに自然の中に生きている。自然に抱かれて生きているんです。海の中に潜って、砂地に寝ころんで、波がキラキラ光っているところがものすごく安心感があって、小さい時に、これを「海の寺」と名付けたことがあるんです。ロマンチックでしょう。ここでは、僕は抱かれて生きてるんだとか、そういう場所を持つのが少年期だと思う。「あの時、あそこの川を飛べた」とか、「川を流れていく時の背中にあたる石ころのやわらかさが僕の中に残った」とか、少年期というのは身体を通して世界を掴むんだよね。理屈ではないんです。そして確かにその世界の中心で、身体を立ち上げていくことを通しながら、身体とともに世界を立ち上げていく。抽象的な言い方ですが、その時に、自分は自立した存在で、自然と向き合っている存在なのだと思う。

中にはこんな小学校2年の子どもがいます。完全に道に迷いまして5時間帰ってこなかった。延々と10キロ先まで、サッカーの重いカバンを背負って歩いて、見つかって帰ってきて、「僕、大旅行しちゃった。一人で」と言った。誇り高くこう言ったからね。小学校2年生頃って迷子になる確率が高いんですよ。自分の行動範囲から出て、自転車で走り回る時期でしょ。縄張りから出て、子どもたちは探索活動を始めていくんですね。距離的な縄張りではない。自分の生きている世界の外に出ていきながら、今までと違う世界と行動を通して出会っていく。その中で初めて、子どもにとって重要な経験が生まれるんだと思う。身銭を切った経験です。そういうものが軸になりながら、人生経験も含めていろんな経験が、子どもの中に蓄積さ

れていくのだらうと思います。

身体論という形で子どもを見ると、今の子どもの手が虫歯というのは、20年くらい前から出ています。学生の世代は、手が虫歯の世代です。合宿に行ったら、女子学生より僕の方が、はるかに大根のせん切りをするのがうまかった。身体で世界を掴む。これが一つですね。

二つ目は関係論ですね。子どもたちは喧嘩しながら遊ぶ。今、男子学生に聞くと三角ベースの野球をやった学生は、ここ数年にわたって一人もいません。それに代わるものがあるとしたら、辛うじてスリーオンスリーとかを言う学生がいますが、もう少し上ですね。中学校くらい。小学校でやった学生はほとんどいません。三角ベースにはルールはない。ファウルは何回打ってもアウトにならないけど、私の近くにある子どもの草野球は、4ファウル・アウトのルールです。なぜかという、リトルリーグなどに入っていて力量のある子どもは、平気でファウルを打って打席を独占するんですね。他の子どもたちは怒るわけです。4回ファウルを打ったら三振だと、新しいルールをつくっていくんですね。喧嘩をしながらつくるわけです。草野球は半分喧嘩しているんですよ。セーフ、アウトどころかルールをめぐってね。遊んでいるのが楽しいのか、喧嘩をしているのが楽しいのか。僕も興味があって、横にいてからかうんです。年齢差の違う子どもたちがやっている時、上手な子どもが打ってばかりいる。「君たちね、1、2年生は5ストライクでアウトにしたらどうだ」と挑発するのね。「おじさん、ばかじゃないの。3ストライク・アウトだってば」と返ってくるので、「3ストライク・アウトやってたら、1、2年はいつも守ってばかりじゃないの」とヤジるんですね。「そんなこといいたら怒られちゃうよ」。でも最後は挑発に乗って「4ストライク・アウトにしてくれ」と言ったりしています。そうでないと1、2年生はだめだと。「ストライキしたらどう？」とからかうのね。「君らがストライキしたら向こうが、困るよ」と言って喧嘩をさせるんです。「へんなおじさんだな」と思って相手にしてくれないこともあるんですけど。

スリーオンスリーだって、公式ルールはない。様々なシチュエーションでルールをつくる。これは大事なことです。ルールは大人がつくったものではない。ルールはどうやら、



ルールをつくるルールというのがあるらしい。それをピアジェなどは、「構成的ルール」と言っています。

「あ、ルールをつくるルールって憲法じゃん」というふうになるといいですね。他の法律は憲法にしたがってできるんだ。作るのは俺たちなんだよ。お父さんたちでもなければ、おじさんたちでもない。ましてやリトルリーグの監督でもない。PTA会長をやっている、リトルリーグの監督が出られなくなって、急遽僕に「代理監督でやってくれ」と言うから「いやだよ」と言いました。しかし、「怪我がないように座ってくれればいい」と言われて、しょうがないからつきあったんですが、子どもたちが来た。「練習はどうしてやるんですか?」、「知るか。勝手にやればいいじゃないか」と言いました。これが、できないんですよ。バッティングの練習を始めたんです。「打つ順番を決めてください」、「知らない、俺はここへ寝にきただけだ。場所を借りるためだけに来ている。自分たちでやれ」と返す。バッティングの練習ができないんですね。何から何まで聞きにくる。ということは、リトルリーグの監督が全部仕切っているわけです。あれは少年野球じゃないと、僕は思いました。監督に「あんたのやり方だと絶対強くないよ。強くなるやり方を教えてやるから」と言って、監督の監督になっちゃったりしましたけど。

子どもが自分たちで遊ぶということは、自分たちでルールをつくって遊ぶということ。その時は、「俺たちがこの遊びの世界の主人公なんだ、大人ではない」わけです。しかし、自分たちでつくることと大人が仕切っていることとの間にボスが必要になるからリーダーを立てる。リーダーが仕切っている時期はあるんです。そしてみんなで決めていく。これは遊びだけではないんですね。その中で子どもたちは自らの力で正義を決め、公平とは何かを決め、最高の道德教育を自らやっているんですね。それは子どもにとって、「社会の発見」なんです。社会は俺たちが立ち上げるものであって、俺たちがつくるもので、大人がつくるものじゃない。これを見つけたのが、一つは少年期です。ギャング・エイジというのは、ここに意味がある。喧嘩をしなくなったら可哀相ですね。喧嘩ができないから、いじめをやっているんですよ。

三つ目は文化論、価値論。子どもたちは仲のいい子どもたちが10歳すぎて、親密な友だち、仲間をつくる。そこで人の悪口を言い、何かの出来事を話し、大人がある事柄の中で価値づけていた言葉の中身を全部引っ繰り返していく。「あの先生はよう」「うちの親はよう」「あの本は」とか、高級なことばかりじゃない。「あいつはきたねえな」と言いながら全部、価値を付け直していく。親密な仲間の中から、子どもたちの価値の世界が立ち上がっていく。親の価値の世界から抜け出して

いく。少年期は、幾分か仲間とともに群れをつくって大人の世界から抜けだしていく。

一人で抜け出すのはまだ先なんです。おそらく10代後半だと思います。10代後半は、仲間を裏切る時期だと思っています。裏切れないようなやつは自立できない、という文化を持っています。つるんでやっていたところを抜けていく。これは10代後半ですね。それまではグループで、一生懸命ある価値をつくっていく。幾分か困ったもんだと思うけれど、学校から帰ってくる途中、全部しゃべって、また家の前でしゃべって、家で友だちに電話をかけて、まだしゃべっている娘を見ている時、いい加減腹がたつたんです。「いい加減にしろ」と言いたくなりますが、あの中で子どもたちは自分たちの価値の世界を紡ぎ上げ、織りなし、立ち上げていっているのではないのでしょうか。

問題はそこの部分をマスカルチャー、サブカルチャーが奪い取っているところに今の困難さがある。いろいろな言い方がありますが、身体論・行動論、関係論、文化論・価値論から、少年期の子どもの世界の課題を見てきました。

少年期とは、明らかに子どもが固有の世界をつくることなんです。中にさまざまな残酷なことがあったり、いじめがあったり、ボスの支配があったり、いろいろあっても、そういうものを子どもたちが解決しながら自分たちの世界をつぐたあげるところに子どもは大人から自立していく世界があるんですね。青年期みたいに子どもは自立しないんです。ここでウォーミングアップするんですよ。第二次反抗期を前に、中間反抗期を実際にやっけていながら大人になる。

もう一つ課題があるんですね。少年期は陽気で元気で、いたずらっ子の少年期というのは、一つのイメージなんです。これを否定するのではないんですが、他方では、陰気で独りぼっちで、しかし充実している少年期もあると思う。登校拒否の子どもたちの中には、引っ越したために登校拒否になった子どもがいる。前の家に自分の隠れ家があったんです。そこに入ると落ちつく空間があった。誰もいなくても、そこで動物のように癒されて元気が出てきて立ち上がっていく。私個人にもありました。太陽を見て、大屋根の上で一人で寝ている。下駄は家の中にある。「あの子の下駄があるのに、家の中にいないのはどこにいるのだ」と親は騒いでいるんです。海の中に一人にいるというような少年期が、もう一つあると思うんです。

そういうことを含みながら、そこへ行くまでのところで石澤さんが言われたように、今の子どもたちは、幼年期のところで身につけないといかんこと、たとえば、人に身体を委ねること、心をあずけることができないんです。今の子どもたちはヘルプを言えない。人に柔らかく身体をあずけながら、人のヘルプを求めていくこと

が、どうもできていないように思います。幼年期のせいなのか、少年期のせいなのかわかりません。安心した関係性の中で生きてこなかったということもあるでしょうし、自分を丸ごと受け止めてもらえなかったということもあるでしょうし、ヘルプを言って助けられた経験がなかったかもしれませんね。

そういう問題が一方にあり、他方には、少年期の抜けて行き方があります。文化論・価値論として述べた、子どもたちの価値の世界を立ち上げ、親の価値の世界から抜け出していくということです。これは生活綴り方が一貫してぶつかっている問題でもあると思いますね。小学校5年生になると、子どもたちは書かなくなってくる。5年生までは子どもたちは何でも言うんだけど、だんだん賢くなって、言わなければいけないことが、どこかで見えてきた時言わなくなる。何をしゃべらないといけないかわかり始める時、子どもはしゃべらなくなる。その時に子どもは自分の言葉を磨きださないといけないのです。その言葉を通して、自分が生きている世界を自分の言葉で立ち上げないといけない。ここから本格的な思春期が始まるんでしょうね。

春日井： 竹内さんからは、思春期をテーマにした次回のシンポジウムにもつながる課題提起をいただきました。ここで、フロアのみなさん方と意見交流をしたいと思います。質問、ご意見、ご自由にご発言いただけたらと思います。

質問： 小学校高学年の8ラウンドには、どういう意味と内容があるのか。

意見： 23歳になる子どもが中学の時、不登校になりました。その時親として感じたのは、私自身が崩されていく恐怖心、「これまでの人生がどうやったんだろう」という問いを子どもから投げかけられ、足元が崩れてくようなものを感じたんです。子どもの不登校を受け入れていく中で、自分が裸になっていく、落ちていってもいいんだという感覚、本当に落ちていって裸になった時、初めて子どもと向き合えた。そこからもう一度、育ちを共有していく仲間としての子どもと出会えたという感覚を受けたんですが、そこで僕は子どもと本当に出会えたのだなという気がしています。

質問： 京都市桃陽総合養護学校で病弱の子どもにかかわっています。以前から悩んでいたことがあって、竹内先生ならどうされるのかなというのが知りたくて。私は数年前に、アメリカに行ったんです。ブルースとかゴスペルが好きで、メンフィ

スとニューヨークに行きました。クリスチャンでもなく、酒もタバコも吸います。真面目な教師ではないのですが、その時、友だちと喧嘩になったんです。破れたジーパンで教会に行くと言うと、友だちが「映画も見てへんのか。アメリカの教会は着飾っていかないとかん」と大喧嘩になりました。「そんなん、服ごときでとやかく言うなら神様と違う。真剣な気持ちでお祈りするなら神様は受け入れてくれる」と言い張りました。自分は満足100%で、友だちは不満足100%でした。竹内先生ならどうされますか。

質問： 池添さんの話で、「強迫的な子育て」という言葉に、わかるなと思いました。私の育てられ方と重ねて聞いていました。大人の育てられ方の中に解決の糸口があると。そこのところをもう少し詳しくお話していただきたいと思います。自分自身が育てられてうれしかったという経験の中から、子どもにどういうふうにしていくか。「強迫的な子育て」は、陥りがちなことだと思いますので。

春日井： まず竹内さんから、少年期の8ラウンドについてと、服装をめぐる見解について。

竹内： 8ラウンドの根拠はいくらか上げることができるんですが。でも私の経験からいうと子どもと付き合う時、やはり8ラウンドやなと思います。この子どもは、8ラウンドやなと思うことがあるんです。自分の子どもにもそう思いましたから。「この子はこういう生き方をしないとハッピーになれんな。ちょっと早いけどな」と。中等教育はそういう世界なんだ。みんなが同じように生きることもないし、同じように進んでいかないといけないこともない。この子どもはこの子どものペースで生きる時が、早くきてるんだと思うんです。

これは身体障害者と出会った時にわかった。身体障害者は頑張り屋さんです。一生懸命頑張る。大体、小学校5年生頃ですが、10歳～11歳で、いくら頑張ってもだめだということがわかる。食事に行く時も、いくら頑張っても身体がいうことをきかないので、いつも遅れていく。一生懸命みんなと同じようにしようとする。だけどうまくいかない。軽い鬱的な状態に陥ります。法的的に陥る。そして身体障害者の子どもは、自分の身体障害を受け入れるにつれて鬱を超えていきます。これまでの頑張りだけの生き方ではなく、自分の身体を受け入れながら生きることの楽しさを覚えるんでしょうかね。養護学校の寄宿舎教育の仕事を20年くらいやってきた、与謝の海養護学校の寮母さんたちと知り合ったことがあります。私自身、そ

この子どもたちに教えてもらいました。

能力主義的にやっているとはいいいませんが、どこかでやむなく選別をされた時、自分の現実を受け入れながら、自分は自分のペースで生きていく。これはね、中卒の子どもはそうならざるをえない。運命は決まっている。僕は、中卒で働くという子どもには激しく言いますよ。「お前の運命はとっくに決まっている。運命は背負わなければ突き抜けられない。お前みたいに逃げ回っていてどうするんだ。ますます苦しくなるだけだよ」と。勿論、仲良くなるまでは言いませんよ。そんなこと、いきなり言ったら殴られますから。実際、殴られたことも何回もありますから。「お前なんかと言われる筋合いはないよ。お前なんか、いい暮らしばかりしているんだから言う権利はない」と。立派な子どもでした。

教育にはそういうところってあるんじゃないでしょうか。日本の戦後の教育は限りなく美しいんですよ。だけと筋ジストロフィーの子どもは日々、死へ近づいていくんですよ。本人もそれはわかっている、周りの子どももわかっている。筋ジストロフィーの子どもの学校は、石川県の養護学校の中にかつてあったんです。死ぬことがわかっている子どもにどう教育するか。未来は美しいだけで教育はできるだろうか。教育はもっと怖いものだと思っているんですね。ロマンチズムだけではうまくいきません。

「8ラウンドで終わっているよ」というのは、政府が激しい能力的選抜の8ラウンドは終わっているの、「君は別の何ラウンドかを固有でつくって生きていけばいいんじゃないの。そういう方向で一緒に歩いてあげたていいよ」という意味です。お母さんにも「過剰な要求はだめなのよ、もう子どもはあなたの要求に押しつぶされているんだから。子どもの現実を見ながら」と言うんです。ここの辛さが大事なんです。「子どもを受け入れてやればよろしい」と言うんだけど、それだけでは、建前なんです。

先程フロアから言われた方のように、自分が崩れていくような深い思いをいっぺん突き抜けないと、子どもは簡単には受け入れられないものです。今も限りなく子どもによって、自分たちの生き方が問われていく。問われながら、この子どもも必死に生きてるんだと思う時に、子どもを受け入れられる。子どもに圧倒されて、受け入れさせられるという感じだね。俺には俺のよさもあるけれども、子どもにもよさがあるから、突き合わせて生きていければいいなど。俺が登ってきた階段を子どもは下っていくんだけれども、俺たちは登ってきた階段の先に、ハッピーであったのか。全身ストレスで小銭は少したまっただけけど、少しも幸せでなかったじゃないか。彼は俺たちが昇ってきた階段を下っていくが、向こうにハッピーがあるかも

しれないなら、つきあってみるかと思う時もあります。これは時代ですね。私たちの世代は、いい思いをして生きてきたんです。これからの子どもには偉そうなことは言えませんよ。年間収入250万円は、僕たちの世代では考えられない。それが標準給与になる時代でしょ。だけど、それで幸せになれるかどうか。

服装のことですが、過激にやることはいいことですが、過激にやることで足を掬われることも覚えておかないといけませんね。生きるということ、実践をするということは、中庸に行くことだと思います。二つの凡庸の頂に行くのが中庸なんです。野性的な元気さと小心のごとき臆病さは両方とも凡庸です。勇気というのはその中間の頂にあるんでしょうね。ところが中庸という言葉は、日本語ではいい言葉だと言われませんか。だけどいつか、中庸のいい意味がわかっていた方がいいと思います。僕は口は過激です。限りなく思想は過激だけれど、実践は中庸を行っていますから、今の大学とも何とか一緒に生きているわけです。

春日井： では、池添さんお願いします。

池添： 子育ての話させていただくお母さんたち、ヤンママさんが多い。そういう方が来ていただくとラッキーと思うんです。そういう方たちにわかってほしいと思うんですよね。その時に、凡庸や中庸や言うと、中国語かな英語かなと思われる感じで、通用しないんですね。できるだけわかりやすく、相手の胸にストンと落ちる言い方を、いつも工夫しているんです。アンケートで「講演なんかダルいと思っていたけど、聞いたらチョウ面白かった」という感想文をもらって「ヤッタ」という感じになるんですね。そういうわかりやすさが必要な、と思いつつ「脅迫的な子育て」という言い方は、先生の言葉もあって、たいへんわかりにくい言い方だったかなと反省しています。自分が育てられてきたプロセスで「いややな」と思うことがあるじゃないですか。それって、自分が「いややな」と思うにもかかわらず、同じことを子どもにやってしまう。言ってしまうことは多々あります。自分と子どもとの関係、子育てを苦労しているので、その結果、導き出した答えが「いつからでもやり直せる」という夢のあるタイトルになっています。もう親とやり



直すことはできなくても自分の中でそれに気づくことによって、ずいぶん子どもとの距離が変わると思ってます。なんでそう思ったかという、うちには相談一杯あるんですが、入り口は全部子どもです。子どものことで相談に来られます。でも帰られる時、相談の出口はほとんど大人なんです。自分のことであったり、パートナーのこと、おじいちゃん、おばあちゃん、お姑さん、近所の人であったり、学校の先生であったり。保育園の先生だったり。大人の存在が特に小さい子どもを育てる時は大きいなと。そのことに気づくことによって、ずいぶん違うぞと思っています。

竹内先生のおっしゃることから、人に身体と心を預けることができないと。今の子どもたち、ヘルプが言えない。でも子どもは言ってると思うんです。その時に親の方が、良い子育てをしなればと、失敗が許さない、そういう脅迫的な子育てを背負わされているとどうなるか。多分子どもたちは一番よく聞いている言葉が3つ。「待って」「後でね」「だめ」。この3つの言葉は子どもが小さい時にたくさん聞いている言葉ではないかと思います。全部その反対をしても、良い子育てはできるんです。子どもが「抱っこして」と言って「ウン」と言ってあげても全然OKなのに「子どもの言いなりになってはいけないのではないか」「だめとしっかり言わないといけないのではないか」と思うてしまう。子どもは失敗が許される動物だと思っています。多分、それは子育てにも、失敗は許される、いつからでもやり直せるということが言えるのではないか。自分の育ちを考えてみて、そこから自分をもう一回、自分をつくってみる。そして子どもと出会うということが必要だと思っています。

もう一つ言えば、笑顔で子どもとであえればいいなと思っています。ちょっと笑顔にこだわっているんですが、なぜかという、人が見ている時の子どもとのかかわりって笑顔になったり、丁寧になったりします。家に帰ってボタンと戸が閉まると途端に表情が引いて角が出たりします。家の中で笑顔があつたらいいなと思っています。

質問： 石澤先生に。最近の子どもたちはゲームが好きなんですが、ゲームに集中するあまり勉強しない、テストの点数も伸び悩んでくる子どもも多いと思いますが、そういう子どもたちに先生はどういうふうに接しておられるのか聞かせてください。

石澤： 子どもはゲームをしたことも作文に書いてきます。でもゲームの中身をあ

れこれ書かれても、私にはちんぷんかんぷんなので、「わからんから、できれば先生の分かる話題にしてくれ」と言うだけです。ゲームをするなどは言いません。書くなどとも言いません。「ゲームをされていて宿題忘れた」と言うのには「それはあかん」と言います。あたりまえですけど。

質問： 大人の価値観から見た時、今の時期は勉強していた方がいいのと思う反面、子どもとして自由にいろんなことを体験させてやりたい、そこから子どものいいところが見つかるきっかけになるかもしれないと思います。この見極め、境目は難しいと思います。一概にゲームをするから成績が伸びないからと、頭ごなしに「勉強しなさい」と言うのもどうなのかなと思います。かといって「ゲーム、うまいな、こういうプログラミンとかやってみたらどうか」というのも難しい話であったりします。先生のキャラクターによっても対応は変わるかと思いますが、参考例をお伺いしたいなと思って質問させていただきました。

石澤： ゲームについては、最近の若いお父さんやお母さんはゲーム世代で、子どもと一緒にゲームをやっているんですよ。中には子ども以上に熱中してやっているという方もあって、以前は懇談会などで、ゲームの影響について話し合うこともあったのですが、今はそれができにくくなっています。どうしたもんかと思っていますが、よく分かりません。

池添： ゲームをしているお父ちゃんの膝で、朝まで寝ている子どももいます。

竹内： 二通りあるんじゃないですか。学生だってコンピュータに命をとられて、神経症のところまで落ちて、いくところまでいかないと終わらないという学生がいます。もう一人は簡単にコンピュータを卒業して去る学生。ゲームだって限りなく、ソフトを80、100本と買っている子どももいれば、人のゲーム機を使って、よそにいて遊んで、ソフトは買わないでやっていて、あっさりと抜けていく子どももいる。僕の言葉で言えば、前者は強迫性なんですよ。学生の時は、「お前、いくところまで行くしかないよな。そういう人間だもんな」と言ってヤジりますけど。理系の学生で、ゲームとかコンピュータとのつきあいで、やりすぎてよくパンクする学生がいるんですよ。

子どものゲームもそうです。ゲームとの付き合い方を子どもたち同士でぶつけあう。アニメがあれだけ描ける子どもがいるから、宮崎さんか出てくるのよね。コンピュ

一タもたくさんやる子どもがいるから、ビル・ゲイツみたいな人が出てくる。そういう仕掛けにすることが大人の役割だと思います。マスカルチャー、サブカルチャーを子どもたち自身が、自家薬籠中のものにどうしていくか。完全に振り回されるのではなく知恵を子どもたちが持っていないといけないかなと思います。一人ひとりではなく、グループで持っていないといけないと思います。



石澤： ゲームをやめると言っても無理な話なので、教室でできることで、もっと面白いことはないかと考えてみます。絵本なども、はじめは子どもがどれだけやるかなと思っていたのですが、結構乗ってくれました。子どもって捨てたものやないのです。絵本でちょっと先生の悪口書いても、笑ってすませてくれるとわかれば、それなりにいろいろ考えて、楽しい絵本をどんどん書いてくるのです。ゲームは禁止ですというより、もっと面白いことをやろうともち

かけるのが正攻法かなと思います。

一つだけ言い忘れました。これを読もうと思っていたんです。一年生の男の子の詩。「もし、まほうがつかえたら、テレビに出てやる。しゅくだいをいっしゅんでおわらせてやる。ともだちをみんな、ぼくのなかまにしてやる。おとうさんがたばこをすわないようにしてやる。ぼくのいえにゆうめいじんをつれてきてやる。きゅうしょくをのこさないようにしてやる。ならいごとをぜんぶなくしてやる。おかあさんがぼくのいうことをきくようにしてやる」。子どもの願いの一端があらわれている、僕の大好きな詩です。

春日井： 学校現場から来られている先生もおられると思いますが、それぞれの疑問などに何かフィットする内容がありましたか。なかなか面白いことを言っていたなど、暖めながら持ち帰っていただくと、また次回につながると思います。

今回は、冒頭、竹内さんから、自分の中の支配的他者、強迫的な他者を潰して、共存的、共感的な他者と一緒はどう飛び立っていけるか。それは可能じゃないかといった報告がありました。それを受けて、子どもの思春期危機と大人の思秋期危機がある。だからこそ手を結べるのではないかという話がありました。そのためのヒントとして身体論、関係論、文化論・価値論という視点から、大人も子どもも見直

してみようという指摘がありました。

大人が思春期をどう潜り直すかという課題があります。大人自身が少年期を、再度どう潜り直すかということです。それは、私たち大人が少年期に文句なく面白く、楽しかったという体験、その時の実感や身体の反応、友達との関係、仲間の世界の価値観。そういうものを大人も思い出しながら、目の前にいる子どもたちと、一緒に潜っていくようなところから、子どもとの出会い直しもしていけるのではないかと、司会をしながら考えていました。

この少年期が、さらに大人に対して反発して乗り越えていこうとする思春期にどうつながっていくのかは、次回10月29日に、第二ラウンドを開催させていただきますので、是非ご参集いただければありがたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。パネラーのみなさんに拍手をお願いいたします。



